月の方舟

ヒコ

祭りに出かけて濃紺の天幕を見つけたら、そっと中をのぞいてごらん。白い布を広げたテーブルの向こうに天幕と同じ色の服を着た男が座っていたなら、それは噺の店だ。

男は、聞きますか、話しますかと訊いてくる。好きなほうを選ぶといい。聞くと云えばきみの好む話を売ってくれるし、話すと云えばきみの話を買ってくれる。

さあ、行っておいで。決して損はしないから。

もうずっと待っていました。ずいぶんと前から、大気がふるえてわたしに時を告げていたのです。川が流れはじめたのですから、もうそんなに長く待つことはないとわかっていました。

川といっても、流れるのは水ではありません。銀色の光の粒なのです。時が近くなると、それはいたるところからしみ出して低みへと集まり、やがてすじとなって流れてゆきます。

川は、かすかに輝いて見えました。その輝きがなければ、透明なすじは目の前にあることすらわかりません。川は新月の夜にしか見ることができません。月のある晩には、かすかな輝きが月光に負けてしまうのです。ちょうどよく、今夜は布を広げたような漆黒の夜天です。

わたしは川のほとりに座って流れに足をひたしていました。銀の粒が肌をなぞり、指の間をすり抜けてゆきます。流れの底には、旧い街やうち棄てられた宮殿が横たわっていました。

なにをしているの

ふいに、声をかける者がいました。振り返ると、少年が立っていました。盛大にひだをよせた上着が風をはらんで、その姿は背丈にたいして大きく見えましたが、声は間違いなく少年のものでした。薄暗いために顔はよく見えません。

方舟をまっている

わたしは少し驚きながら、正直に答えました。

それは、なに。少年は川を指して訊いてきます。

それが流れはじめてから、眠れないんだ。風がうる

さくて
　これは川。方舟が来るのだもの、川がなくては
　水のない銀色の川など見たことがなかったのでしょう。それに、大気のふるえを感じてはいても、それがなにかはわかっていないようでした。少年は小首をかしげましたが、それ以上こだわることなくわたしのとなりに腰をおろしました。
　方舟、と云ったね。きみはノアの方舟でも待っているのかい
　ちがう。あんなのは方舟じゃない。少年の気安さに導かれるように、わたしもつい、気安く応じてしまいました。でも彼は気にする風ではなかったので、これでかまわないと思いました。
　ノアの方舟は、ほんとうは帆船だった。だから、ノアズ・アークではなく、ノアズ・セイルが正しい
　へえ、見てきたようなことを云うね
　少年はほほ笑んで、わたしと同じように足を川にひたしました。
　きみが待っている舟は、どこへ向かうの
　月の都へ
　いいね。ステキだ
　その言葉に、からかいの響きはありませんでした。
　彼は夜天を見上げて云います。
　でも、今夜は新月だよ
　彼が云わんとしていることはなんとなくわかりました。その視線は、月への航路をたどっているのでしょう。
　新月だって、月はちゃんとそこにある。ただ、見えないだけ
　そうか。……うん、そうだよね
　少年は、なぜか安堵したようにため息をつき、口笛を吹きはじめました。それは、哀感の漂う、悲痛とさえ云える旋律で、わたしの心を騒がせました。
　とおい昔
　口笛が止んだので、わたしは話をはじめました。わたしの胸を打つほどの哀しみを抱いた少年を、少しでも楽しませたいと思ったのです。
　とおい昔、あまねく者はみな、月に棲んでいた。月の都には、はじまりの男女がいて
　はじまりの男女
　そう。すべては、彼らからはじまった。支配とはちがう形で、みなを治めている
　アダムとエヴァのこと
　そうだと思うなら、そう呼ぼう。……月の都で、

みなは幸せに暮らしていた。でも、あるとき、エヴァがアダムの怒りをかってしまった
エヴァは、なにをしたの
銀河に舟を浮かべて星くずを拾っているときに、アダムの盃を落としてしまった。アダムは、エヴァを下界に追放した
わたしは言葉を切って、少年の横顔を見ました。薄暗くても顔が見えるほどに、少年は近くにいました。彼はじっと虚空を見つめています。しかし、視線に気付いたのかふとこちらを見ました。目が合うと、気まずそうにうつむきます。
途方もない話だとわらう？
なぜ。……きみは、ほんとうのことを云っているのに。少年は目を伏せたまま指先を川にひたしました。
方舟は、エヴァを連れに来るの？
わたしは声に出さずにうなずきました。彼は言葉をつづけます。
追放したのに、今になって迎えをよこすんだね。云いながら、手を川から引き抜きました。銀のしずくが散り、少年のズボンに落ちます。どうして、今になって
アダムは、エヴァを愛していたから。崩れゆく下界においておくことはできなかった
崩れゆく……たしかに、ね。近ごろ、世界は少しおかしい。ねえ、こんな詩を知っているかい
〈星が降り、天が落ち、月は静かに嗤う
この世界の終わりに、君は何を想う〉
少年は目を閉じてそらんじたあとで、じゃあ、エヴァは月の都へ帰れるんだね、といくらか明るく云いました。
わたしが首を横に振ると、少年は小さく息をのみ、わたしの答えを予期したようにくちびるを噛みました。
エヴァは……母は死んだ。月で生まれた身体には、ここの空気は合わなかったのだとおもう
少年は目を大きく開いてわたしの顔をのぞきこみました。
きみはエヴァの――。それできみは、大丈夫なのかい
ここで、生まれたから
それなのに、月の都のことを知っているんだね
覚えているから。干からびた母から這い出したときにはもう、すべてを覚えていた

この話は、わたしにとってはもう乾いた傷でした。つついても、皮がはっているので血は出ません。しかし、少年にとってはそうではないようでした。彼は顔をゆがめ、視線を落とします。

夜啼鳥って、知っているかい

いくぶん低めた声で問うてきました。わたしは首を横に振ります。

青い月の夜にね、波間から生まれる鳥さ

海から生まれるの

そう。生まれたての濡れた翼は銀に輝く。夜啼鳥は、親をさがしているんだ。身体が乾くと、鳴きながら飛んでゆく。彼らは、夜のうちしか飛べない

それで、親には会えるの

どうなんだろう。夜啼鳥は、月夜の国へ消えてゆくんだって。でも

少年は空を見上げました。その拍子に、ついにこらえきれなかった涙が頬をつたい落ちます。

今夜は月がない。月夜の国へは行けないね

わたしは指先で涙をぬぐってやりました。寒くもないのに、少年の頬は冷えきって紅みが差し、果実を思わせます。

月は、いつもある。見えなくても、天に

きみは……エヴァなのかい

おそるおそる、少年はわたしに問いました。先刻は気まずそうにそらした目を、今度はまっすぐに見つめています。

同じではない。でも、記憶は継いだ。母との境はあいまいで、じつはとても近い存在なのかもしれない

すべてのものがアダムとエヴァからはじまったのなら、エヴァはすべての母だね

少年の言葉が途切れたとき、わたしは少年をこの腕に抱きしめていました。なぜかはわかりません。身体がそれを欲したのです。

わたしの肩に頬をつけて、少年もまた腕をわたしの背にまわしました。そうして力を込めます。しかしいくらきつく抱き合っても、冷えきった少年の身体はわたしとは相容れませんでした。

……母さん

小さく、しぼり出すように少年は言葉を吐きました。肩は小刻みに震えています。ひだで飾った上着の下の身体は、壊れそうなほどに細いものでした。わたしはいっそうかたく彼を抱き、目を閉じました。

しばらくそうして身じろぎもせずにいましたが、

やがて少年はわたしの腕をすりぬけました。
月の都を知るきみは、この世界がみにくいと思う？
みにくくて、でもうつくしい。歪んでいるからこそ、愛しい、と思う
それが聞けてよかった。ぼくもそう思っているから
ほほ笑んでいるはずなのに、その笑顔は今にも泣き出しそうでした。
あれが
夜天を見上げて少年が小さく声をもらしたので、わたしも彼と同じ方向に目を向けました。白くぼんやりと光を放つ舟が見えます。
あれが、方舟なの？
そう。じきにやってくる
まだ小さくて、進んでいるのかもわかりませんが、少しずつその姿が大きくなっているように思えました。
方舟は、みなをのせてゆく？
いや。みな、長い時間の中ですべてを忘れてしまったから……
きみひとりで、行くんだね
うなずこうとして考えなおし、わたしは少年の手に触れました。
行こう
え、と少年はこちらを向きます。
行こう。ひとりくらい増えても、変わらない
でも、ぼくだってすべてを忘れてしまっている
舟は、確実に大きくなって、こちらに近づいてきます。
月夜の国へ行けるのに。——夜啼鳥、母をさがしているのでしょう？
わたしの言葉に、少年は茫然と首を振りながら立ち上がりました。手を引かれるようにしてわたしも川から足を引きあげ、彼の目を見すえました。
舟はもう、目の前にせまっています。なめらかな白木の舟は、どういうわけかそれ自体が淡く白い光を放っていました。まろやかな光はまぶしいものではありませんでしたが、そのおかげで少年の顔をよく見ることができました。
少しの怯えと強い意志をたたえた目に涙を浮かべて、少年はもう一度首を振りました。
方舟は、ついに川に降りたちました。音もなく、なめらかに。大きな舟です。高さは、わたしの背丈

の五倍ほどもありました。
下からでは、甲板の上をのぞき見ることはできませんでしたが、上から白木の階（きざはし）が下ろされました。それに足をかけ、わたしは少年を振り返ります。
行こう。一緒に
そうして手を伸べました。少年はわたしの手に触れ、かるく握ってくれました。しかし、わたしがそれを引くよりはやく、手を離してしまったのです。
だってぼくは、ここで生まれたのだもの
消え入るような声でした。これ以上、彼を悲しませてはならないと思いました。わたしは口の端を持ち上げ、かろうじて笑みを浮かべると、階を上りました。
さようなら
背を向けて云った言葉が、彼に届いたかどうかはわかりません。
甲板にたどり着いても、ひとの気配はありませんでした。階は手を触れなくても甲板に戻ってきます。
わたしは舟のヘリに立ち、少年を見下ろしました。彼は、まだそこに立っていてくれました。わたしたちは互いに手を振りましたが、言葉は交わしませんでした。もう、かける言葉は、なかったのです。

舟がすべるように川を下りはじめました。少年の姿は遠ざかってゆきます。彼は、泣いていました。わたしもまた。かすかに、哀しげな口笛が耳にとどきました。
少年の姿が見えなくなったころ、舟はゆっくりと上昇をはじめました。月の都に向かって。
少年は下界で生まれたのだと云いました。その言葉を思い出して、わたしはまた涙を落とすのです。
わたしもまた、下界で生まれました。それなのに、崩れゆく世界から逃げるように、まだ見ぬ故郷へ渡ろうとしているのです。
〈星が降り、天が落ち、月は静かに嗤う
この世界の終わりに、君は何を想う〉
わたしは甲板に座り込み、口笛を吹いてみましたが、空気が漏れる音ばかりで、旋律とはほど遠いものでした。
ふと指先を見ると、かすかに銀の粒がついています。それをしっかりとにぎりしめ、胸に抱きました。
みにくくてうつくしい、この愛しい世界をあとにして、わたしはどこに行こうと云うのでしょう。
白く輝く方舟は、わたしひとりを乗せて夜の中をどこまでもすすんでゆきます。たどり着くはずの月

の都が、夜啼鳥の消えてゆく月夜の国であったらどんなに良いだろうか、とわたしはいつまでも考えていました。

お客さん、噺の店ははじめてですか。それは光栄だ。うちの店を選んでもらえるなんてね。
そうそう、この天幕の中での噺は、売ったものでも買ったものでも口外は遠慮願いますよ。うちはそれを商品にしているのでね。
ご承知いただけますね。
では、またのお越しをお待ちしております。